洋学文庫
文庫8
C 310
3

西洋雜記卷之二
大東洋
東道道東洋洋
道道人事標
LINDTO

京都帝国大学図書

西洋雜記巻之三

小東洋　夢遊漫筆　第二十二
夢遊道人筆録

聽信民治義塾

西洋曆法の説

曆法ハ「ソン子・ヤアル」「マアン・ヤアル」の二種にして「ソン子」ハ日なり「ヤアル」ハ年なりこれ大陽の曆とし日の躔度ハ固より年数ハ時刻分秒如德亜歐羅巴阨入多等の曆法これなり「マアン」を月なりこれ太陰の曆ハして月の圓缺ハなりて年数なり時刻定むる唐土・天竺・亜剌比亜等の

LINDTO.

曆法これなり太古「ヘブレウス」の曆法を太陽
の曆みしてその正月を歸しして「ニサン」といふこ
れ今の西洋の三月と四月の間なり所といふ
羅馬(ロウマ)の始祖「ロムリユス」鴻業始開きて王位を
帝き制度を建て正朔を改め一年を分て十箇
月となし西洋の三月を以て正月となす其
後「ニユマ」王の世に至て改て今の如くみナニケ
月となるもこれども毎月の日數今とは異なる
曆を二十九日とする說なり　まて甚後「ジユリウス・カアエサル」帝歐羅(エウロツ)
巴(パ)洲を一統せしてして始て今の如くの日數と定め
て今西洋の元旦は冬至にして第ナ一二日の
比なり所これを称して「ニイウ左ヤアルス・タツリ」
といふ乃ち新年の日とする義なり
正月は「ヤニコソレイ」といふ「ラテン」語なり以下同　日數三ナ一日なり
和蘭語一名「ロウー・マアンド」といふ(月)　此月二ナ三日ありて輪
廻まて宝祝宮の初度あいて原
二月は「ヘブリユアレイ」といふ日數二ナ八日なり　和蘭語
一名「スプロツクル・アンド」といふ(いはゆ二ナ八日なりしを「アウ
グストス」帝の世に此月を二ナ八日

となして「アウクストス」の月を三十日とちすこん　三月は「マアルト」いふ日
「エリウスカサル」帝の例を用ゐとなり
數三十一日にして和蘭語一名「レンテ・マアンド」（春月）といふ
四月は「アップリル」といふ日數三十日にして和蘭語一名「カ
ラス・マアンド」（萃月）といふ「アップリル」を上古の世の神人の
名なりしてこれ神海泡より出て此月「キリイキス」出り
現れしゆゑに因て名くといふ
五月は「マアイ」といふ日數三十一日にして和蘭語一
名「ソルライマアンド」（蚕生月）といふ一説いまく「マアイ」は花の
名なりこれ此月多く花開く故なりといふ

六月は「コウ子井」といふ日數三十日にして和蘭語
一名「ソオノル・マアント」（夏日）といふ
七月は「コラリイ」といふ日數三十一日にして和蘭語
一名「ホライ・マアンド」（草名月）といふ「いはく月三十日なりしを斗
エリウスカアエサル」帝の世に改て
三十一日となせり
八月を「アウクストス」といふ日數三十日にして
和蘭語一名「オークスト・マアント」（苅稲月）といふ此月二十三日に
大陽廻りて室女宮に入これ此月古名「セキステリ
ス」といふ「等六」とは義なりて昔「ロムリ
ユス」主の世にはこれ今の三月を以て正月とせしゆへ

此月ハ第六月ゆゑを以て故なりとなす「アウグストス」を其後の王考乃名なり之此月地以て帝位せしめ因て月名を改め名けたりなりとなす

九月地「セプテムベル」となす日数三十日にして和蘭語一名「ヘルフストマアンド」と秋月なす「ラテン」語にて「セプテム」を七とし人ほ義なりこれ今世ハ至るまでも尚「コムリコス」の時の舊称地改めさ保なるべし

以下十月十一月十二月皆ことに同しかるべし

十月地「オクトヲベル」

となす日数三十一日にして「ラテン」語ロン「オクト」ハ八なを和蘭語一名「ウエヘルン・マアンド」酒月と

十一月地「ノオヘムベル」となす日数三十日にして「ラテン」語「ノオヘム」を九なり和蘭語一名「スラクト・マアント」となす十二月地「デセムベル」となす日数三十一日有を「ラテン」語「テセム」を十なを和蘭語一名「ケルンテルマアンド」冬となす「カアル・ゴロオト」帝乃世ニ此月の別名を「ヘイリケマアンド」と号に是聖月となす保義ありてむかし聖人其なる

者此月誕生まゝ保更なりとふ

以上十二箇月三百六十五日六時なり四年一ゝび二月ゝ二十九日となりて一年三百六十六日となる彼方ゝゝハ一晝夜を二十四時ゝ分ち子の刻より午の刻までを十二時となり又午の刻より子乃刻まゝゝ迄十二時となるこの法ハ上古乃世乃阪入多國より傳へゝ保者なりとふ

阪入多國乃曆法ハ太陽の曆なり一年十二箇月三百六十五日にして餘まる時刻分抄なゝ毎月各〳〵三十日ゝゝ抄なり十二月のゝ三十五日ゝとなり

亜剌比亜國の曆法を太陰乃曆なり一年十二ヶ箇月三百五十四日八時四十九抄なり三十年に十一閏迄置〳〵從〳〵閏とハけ方乃閏月ゝハ行ふ閏日ゝゝて一年三百五十五日とすゝ保をふなり

都児格國まゝけ曆法を用ふとふ 拙そるに先夏暑冬寒 ゝ抱〳〵ずゝて一年を成す者なり

亜剌比亜乃十二箇月を「ミヱハルラム」正月「サハル」二月

「ラヒア・プリオル」三月「ラヒアポステリヲル」四月「ヨマダ・プリオル」五月「ヨマダポヌテリオル」六月「ロヤアラ」七月「カアバレ」八月「ラマダレ」九月「レカワツル」十月「デユルカレタル」十一月「ニエルベツシア」十二月なり而して毎年正三五七・九十一月六ヶ月毎各三十日あり二・四・六・八・十・十二月六ヶ月毎各二十九日あり合て三百五十四日なり時として十二月に一時閏加へ三十日となし天空を以て月の圓なる時を以て月既とするよ

一支那の諸書よいぼ或を誤まて天竺の翔を真臘（今の東埔寨）なりとい者ハ第ハ也

閏歳にもまゝかゝるゝば閏月置く但是閏九月なるを真臘風土記に見へたり

西洋天文の原始

西洋天文星象の學ハ上古の世ハ泥入（エジプト）多國の旅ゝ始発て是を造作せりこれ故彼方諸国天學の權輿とす天竺の天文も蓋し彼方より

佛ゝ祖ゝ孫孫と見ゝて十二宮乃事不空三藏所譯
の宿曜經よりゝたり個ゝ二十八宿を月日に配する
ことハ支ゝ天竺乃說にも有由ゝ二十八宿の
事ハ支那古聖乃所定ゝて天竺ゝ意ゝ
きゝ入ゝ因ゝ乃ゝ心ゝ歩理なゝ事ハ蓋ゝ不空
が摩竭陀會せゝなゝ事ゝ因ゝ思ふゝ古來
翻譯乃佛書乃中にも陀會乃說定めて多き
事と思ハゝなり

西洋上世鬼神乃說

西洋諸國上古乃世ゝ聖人多ゝ興ゝ
教ゝ建ゝとりゝも昔ハ種ゝ乃鬼神を尊信
するゝ因ゝ奇異怪誕乃說話ハ奇異な
る辭言喻乃影きをめゝ影ゝ羅馬(ロウ)國に於ゝ上古
乃世ゝ「コピイテル」歳星「ヲブトニユス」「アポツロ」「マル
ス」(戦神)「メルキユリウス」辰星「ユルカニユス」のハ乃天神
ゝ「ユノ」「ミネルハ」「ヘニユス」太白「デアナ」「セリ」「ヘスタ」
乃六の天女ゝ崇信ゝ合孫ゝて「コンセンテス」と
ハ此十二神各月ゝ配ゝ黄道十二宮ゝ配ス

乃ち「ミネルハ」を白羊宮に配し「ヘコエス」を
金牛宮に配し「アポッロ」を雙兒宮に配するを
影なり日月五星四元行等皆その像なり羅
馬國もまた曾て上古の世より圓形の大殿を建て
賞惡（マルス）・大白（ヘコス）の二神を奉じその他種々の鬼神
を祀附祀（ゾエ）その巧妙美麗世に名あり此殿を名け
て「パンテオン」といふ此殿今尚なほ殘れども「コンスタンチニコムの大寺
乃世より今まで保存乃諸神をのそくといふ
此他諸國にも此等乃諸神を奉ずるあり而して埃入（エジプト）
多所祭乃像乃種類最多しといふ埃入多國

人乃說にいはく太古の世に「ケニフ」といふ尊神あり
ありて乃口中より一卵を吐く全世界此卵を生る
この世界開基乃如なりと故に其像臣大にして手
に卵を捧ずるの形をなす又いはく「セイベレ」といふ
女神あり天地父として地を母として生れ鎮星の
正妃となり諸神にもこの生むところなり故に歸し
て神母といふなり天下の諸獸にも此神乃
声音氣息に因て所生なり其像頭に寶冠を
載き手乃一ツの須臾を百花を衣となし

諸獸悉、其傍ニ圍繞す或る時ハ寶車に乘て四の獅子車を駕すまゝ「キリイキス」國中「ペロポネシヨス」の地ハ殆ど一の歳星の詞を建ハ甚莊嚴美麗なること紙筆ニ盡すべからず黄金諸寶石をいろ〳〵飾り其巧妙精密世ハ絶たる正中に歳星真形の極て大なる物玆安置し傍ニ諸神を附祀すこれ天下七奇乃其一なり文鎮星の如玆「セレス」とゆふこれを農神と称ス「バッキユス」とゆふ〳〵ハ神と共ニ太古の世ハ耕

○其狀肥ること小兒のごとし

農の業玆人ハ授けしゆゑ神と如此に称する之その「バッキユス」なるゆゑ乃ち歳星の子ハして世乃釀酒の多玆護る故ニ称して酒神とすまゝ鎮星乃子ハ「シロン」なるその形ち真像半身人ハして半身馬なること玆いうまとゆふハ此神悉に好むゝ馬ハ騎ち弓矢玆捷ちゝ高山ハ登ちまゝ衆の藥草玆試ちゝ真性功玆區別して上世の名醫たちその他天象輿地乃學を極め授ち殁すゝ乃ち〳〵その靈魂天ハ星ちゝ十二宮中乃人馬

宮となるがゆへなり

又歳星の女神「デアナ」とゝ世に是を獵神と
称し此神を通廣大みなるを一躰三名にして天み
左くは「マアン」月輪をも現し世界みなを「テアナ」
と称し地獄みなを「ヘカツテ」と号す相傳
ふ此神夜を天より降まるを尊信する者
に多くよく福祐賜ふと故に世に多く是を祭祀
す而して其祠廟ふ亜細亜の厄弗俗四ふ所左
の者最世に名ありを南懐仁が説の如く供月祠廟をりふふ
をの天みを左くは月と現ずるゆへなるを

其造建凡そ二百餘年にして始て成る中ふ一百二
十七條の義玉の大柱にをその美麗巧妙人の心思
の及ぶ所にあらざるこれいま世にあること二千六百餘年
に亜瑪依獨の人所建みしてまくこれ天下七奇
の最一なり此祠廟のまくまを上の巻一巻にもあり其他此類の諸神きを
めくを多し又或をいをくは羅馬四第二世「ニユマ・ポムピ
リウス」王の代に「デアナ」天より降くを一の清泉を
羅馬の地に湧かをしむ男婦これに浴する者を安
産せしめる者なり王をの靈應を尊みて祠廟を

彼四方を建し事ありしを或いはいまゝ上世ふ「テイホ
こ」とり〳〵ふ一巨人ありしその姉を「エキドナ」とりふ半
身を女ふして半身を蛇なりその生む所の第
一子なる「セルベリュス」とりふこれ三頭三喙の犬ありて地獄
の門戸を守る悪人の霊魂地獄に堕ちる者ありれば
のち是なる嚙むそう他「ヘイタラ」「レルナ」「キメラ」「子メ
ア」等の諸子ありな異形なりとふ而して中世こ
至て聖人まゝ〳〵多〳〵おなしく法教日ゝ明に
まゝ〳〵「コンスタンチニユム」「カアレル・ゴロオト」等の諸聖

帝政令なる定めて〳〵妖妄の浮言なる禁制し諸国
の邪魔の廟なる代種々の淫祠なる悉く破滅し
てよりを邪霊魅諸妖盡〳〵絶て今に至て邪妖の
人なる迷すとりふすなしとりふ則ち知る妖い人
に由て興るとりふこと徴み葛代に易の金言
なること

西洋図書に辟言諭なる設る説

西洋の書図のうちをめて領袋にして所寫の其
精妙なる窮むべふ世に知る所なを而して

其畫中譬諭をなす者甚多し たとへば書籍の
首に其撰者の像を画き傍に「エンゲル」羽翼ある人を画
し或は笛を吹く形なるは「エンガル」の意にて
笛声の遥に聞ゆるが如く其撰者の声價遠聞の
意に取るなり また「マアリヒ」とふ人を拂郎察四
の人ふたり拂郎察語と和蘭語と併合集ふ所釋
辞書を著せり その後和蘭の人「ハルマ」なる者これ
を訂正して又二国の釋辞書を著せり その
首の図は上面に「ハルマ」の像を画き下に数国の

人「マアリヒ」を踏まえ傍に息ふ氣を
避くる鼻を掩ふの人ありこれその踏まふす者
を「マアリヒ」の書なりとして新たに訂正ふの意を
示し臭氣を避くる者は「マアリヒ」書の紛雜して
ふ多くふ示にの意なりその他
邪気乃類頗多し また彼国の首をして「ヒッポセ
ンタウロス」とり ふ異形の像ありこれその半身は
人にして半身は馬なりこれは上古の世に始めて
「ニッサリア」国「キリイキス」の属する地 を聞きたる人なり此人始め

て其地に至る時に馬に騎れりその時「テッサリア」國の地にていまゝ馬と云ふ者なき故に土人是を見て大に驚怪して人馬合して一躰なりと思へる其後此人を土人に教化して大に德政施して人を安んじ懷くこれにより此人始めて其地の人々たる時の像を画き且其德の人に勝れ多き故を表して異形を飾に加へたる者なりと云ふ

乃首に二三千年以来の名ある人物の首像數百

有り故國セリ其中に羅馬（ロマ）の「コンスタンチン」第二世乃帝の像ありて小傳の下に記して曰此帝の首像を画きたる者今傳なきゆえ然ども此帝の時所造乃鐵貨当世に存して鐵文に帝の面ありてほゞ此に模写すと云ふ則知る其代乃首像もまた的實なる事有りて敵なく意を以て畫さる者なるあらさるなり

亜細亜・亜弗利加乃像乃説

西洋乃畫譬諭を以て亜細亜・亜弗利加の二列

を図して皆人の形となす其亜細亜を婦人に
〳〵身に繡衣に諸種の花葉を荷ひ右手に丁
子胡椒香桂等の枝を把り左手に香爐を捧げて
「コヲイ イロオリ」香脂の名 を薫し駱駝その後にたゝせ
ふとの亜弗利加もゝ〳〵婦人にして黒色裸
躰編〳〵毛身に満ち鼻を象に同じく
鳥羽を餘り右邊に獅子ありて左邊に蛇あり
ひ蝮蛇ありてこれらなる其地方の産物を以て
礎像を設けるものなりと

「キリツヒラシ」の説

「キリツヒラシ」を極めて奇異なる生類なり其躰
に四足を具すれども前部半身は全く鷲にして
翅ありて耳聳て長し前足もまた鷲の足なり
後部半身を全く獅子にして尾長く後足また
獅子の脚なり これ北荒の地に産する不思議の
しろ鷲猛なるものなり
絶〳〵これを見しものなし或いは上古の世阨入(エジプト)
多(ト)國の淫祠中に此像を設けて蓋し寓言のも

弗尼鬼鳥の説

西利亜（セイリヤ）の邊に一種の奇鳥あり弗尼思（フニス）と名く其壽六百六十歲なれば其身なきを以て妻孕まんとす依て知る因て「アラビヤ」香桂等諸の香木の枝を以て巢を作る其上に居て天氣熱する日を待ち大陽の火を反て以て自分焚死す其肉遺塊なりて一箇の虫を生じ此出まく化して弗尼思鳥となるとなり之を考うるに寓言なれども上古の世に「フニシア」（西利亜三大國の一）子孫傳繼して文華盛なるの意なり以て此譬論をなすものなりと

警沒辣山の説

那多里亜（ナトリア）四利細亜（イレア）の地に大山あり警沒辣（キメラ）という此山に一種の異獸ありて頭を獅子のごとくして身を野羊の如く尾を龍の同じくして中より火烟を吐くこれを名けて「ペツレロホン」という世にその圖を傳ふ考うるにこれまた寓言にして此大山其頂上恒に火烟を噴き其邊獅子多く羊を牧して

豊葦繁衍し野羊蕃息し下邊を沼澤多
くして龍蛇住し人ども昔よりこれを怕れて往
者なうし故「ベッレロホン」とゝふ異人始めて裏
城帥ゝ此山城開きくこれを居住せし故なりと
ゝふ此事をまゝ利瑪竇が所著の坤輿全圖に
もそへたり

「セイレンヽ」の說

「セイレンヽ」を海中に生ずる所石の一種の怪物なし
てその上躰を婦人かしして下躰も魚なりよく麗

魅の妖術故なす若その声故發して歌を唱ふが
如くなる時ゝを風波大きに興りて海舟故覆没す
此物意太里亜(イタリア)國の屬嶋西齊里亜(シチリア)の海邊に行
といへども未だかつてもたゞ伝說故いひつゝて世に其像故
畫きゝ山宗飾故かゝるごとをとりしともたゝて其
的實に此物いうることをきかず蓋しまゝ昔時
乃富言なりと

馬哈默の說

馬哈默(マホメット)を元明諸書に所謂の默德那國王謨罕

驀德なるものしてその建る所の教をもか
ちち所謂回〻教まく天方教なる者あり「ヒブ子
ルス」人名の書所載なる按ずるに馬哈默を亜剌比亜
回乃人みして甚父を佛教の徒なりを「ヨオデシ」
乃女なり（いみ〻の世より如德亞の國都「エリサレム」城の廢せし時より甚回人四方に教すその子孫今「アジア」「エウロツパ」「アフリカ」三大洲の諸回中に駢〻くらをて皆を上古祖先よりの教を奉して放て改めざるこれを總称して「ヨオラン」とよぶ）
西洋中興（其説上に見ゆ）の後第五百七十年（日本欽明天皇三十一年陳の宣帝大建二年）
五月五日みに亜剌比亜の默加乃地に生る馬哈默父の
業なる駒〻大富の賈人たり甚後「ヤコビ子ヒ」教
の徒「バシラス」人名「子ストリア」教の僧「セルジウス」
僧名および「ヨオデン」の人等が諸教を混集して加ふるに
以て〻遂に馬哈默教門を立て亜剌比亜諸回
み教を施し「アルコラン」（又「コラン」ともよぶ）とよぶ経典三
十部なる著をせり（明人の説に甚経百三十藏とのこれなるべし）その後六百
一十六年（日本推古天皇二十八年唐乃高祖武德三年）の七月十六日默加より遷
まる〻黙德那乃地より居を六百三十一年（日本舒明天皇三年唐の
大宗貞觀五年）の二月十七日みに默德那に於て歿を壽六

十二月ごろ地に義ゐる明人の説ゑ隋の開皇年中に其國人始て其教を伝へ〻中國に入るゝ行ひ志
るゝとも西書の説ゑば馬哈默を陳隋ゑり唐の世人初までの人なれば隋乃
開皇中ゑ其教支那に入るとゐる詳なるべし上乃説ゑり「ネストリア」「セコ
ビテセ」「ヨオテセ」等乃教を混して「馬哈默教門を建ゆと拙ゆ西書に
いを〻西洋中興五百年ゑ比るゆ「ネストリア」の教「カルデア」印度
人支那等ゑ流布ゆと行を志るゆ隋乃開皇
中に支那ゑ入るゆ教ゑすなわち「ネストリア」教乃也 甚墓西紅海地出
るゆ三日程黙加例主乃都城を出ること四日程行き
遠近諸國ゑ人多〻こゝゑ至ほゝ拜禮すゝ此地
ゑ美麗なる大寺觀ゆまこれ所謂天方ゑ禮拜寺なるべし これ地名
けて「ミスケエ」とゐふこれ至聖とゐる甚規制方形に
の義なり
〻〻黑石造成〻門あり内平処そこな白玉石
地用ひそゑ好面長廊地用ひ窓および柱そこな
玉石なを用ゑを鏤〻燈籠地掛〻こゝな甚大
ゑ〻をゆ高八九尺或を丈餘ゑり〻ゐ外面こゝを
ゑゆ大塔ゆを甚内ゑ「ミナレエキレ」とゐふゐ塔最
高〻ゝゐふ而〻をゆ「アルコラレ」の經文に載
を塔奇説怪誕甚多〻勝ゝ計ふべかゝべ
をゆ天堂地獄ゑ地説〻せいを〻天堂ゑ生る
ゐを乃を未來永劫歡樂地窮極〻〻少し
も驗來なく美麗ゑ少女毎日代る〻〻ゑ来を

拵席ニ薦め種々の飯食美味芳潔なる供〻浴を設め乳汁香花の湯に以て〻居るに珊瑚明珠美玉百寶に以て造建き〻所の官殿樓閣に以て〻その地獄に隨ふる者を毎日享割の千辛万苦に受け死〻こと〻死〻終世を〻ることなし〻といふその他多もまた〻なこれ有類を是に以て〻西洋の人馬吟默に謂て〻「ハルセプロヘエト」と称ほこれ假聖とり〻所為なる

印度四佛法の説

和蘭の人「ウヲテルスコウテンレス」が所著の東洋行程記にいを〻印度諸國其人多〻「ヘイデ子」の教に奉ほ所の神像種〻一なるが「ヘイデチン」地獄の所多の異形の像を祭る教の總名こそ種〻その中に最尊む所のを「イワラ」「ヒストニコム」「ブラマ」「ラム」等の者なりとれこれ天中天なる所もの〻みと称〻て「オツプルゴット」和蘭語に〻神と〻る意なり〻といふその「イソラ」を一名「マハデラー」といふ其像に見るに皆甚巨大み〻て形容甚奇なること甚頭面を人と異なること〻〻とり〻ども三の眼にてその

一を額上の中央に位して十六臂にして種々の物を把る領に玫瑰および諸種の花を掛け飾となし氣皮を衣となし象皮を外套となすと相傳ふむ

う〜「イワラ」天よりして高山の項に降る神時玫瑰諸花芳馥〜諸鳥妙音を発し水上清浄なして奇相を現ず「イワラ」すなたち四人の教を絶し人々安樂得道せしめて而後まもなく天に昇るといふ「イワラ」の配す所の女神を「パンメスセンイ」といふその像姿容温柔多く配合して四子を生むこれを称して新神と

いふ第一子を「ケナハデ」といふ「ソイケルセエ」キノヽ

ふ居まさしこれに主たり甚像鮮を人に異ならしとともの頭及び牙咏共に象に似て而四乃臂四を第二子を「シリ・ハニコセン」といふその形容奇異にして頗る猴に類せり像則意蘭国に于て孫に多くこれを奉すその他の印度諸別及び支那日本等の国に至るまで神像を奉して是が為めに祠廟を設て第三子を「シコベルベンニア」

とゆふその像六面十二臂四足第四を女神な
り「パタラガリ」といふその像姿容美麗なを
とゝども八面十六臂四足耳に懸るに寶玉を
以てしまゝ二の大なる象牙を以て飾となす此
像王國「カランガノル」の地に施て殊に多くこれを奉
ぜるその「ヒストニユム」もまゝこれ一箇の尊神なり
此神神通廣大みゝして變化方なし故に其變形
種々一ならず一ならず或は半身獅子みゝして半身
人なるも四足或は一頭四臂なるも四足或は美麗
なる童子の形ちなす四足他變形尚甚だ多し
また「ソリ井ケルセエ海波糟」に居る二人の美女その傍に
侍す此神を使ふ世界の人ちに保護せる
事地主と同じゆふ拙僧觀音の說にこれ
尊神なりその「ブラこ」もまゝ
四足或はいとゝこれ天地創造せるの神にし
てその合に考へゞふ所の大小の諸神多くしと
ゆふその「ラム」なるものをまゝ一名「ラモ」といふ
拙僧このこれ釈加なり「とびヲルス」の書に印度をいハ「ラマ」と
いひ東京にをいて「シアガ」といひ日本かとハ「シアッカ」とゆふ

聖人にして初めを至尊の位に居り
しが甚妃「シッタ」なる者地辞して道地学びに（拔すに
佛書に釈加いまゝお家をすてゝ浄飯王の太子たゝ時この姫の名を
邪須陀羅女とゝふ「シッタ」をすなわち須陀なるゆゑ釈加の姓の名
地悪達太子とゝふを音まゝ遂に一種の教門地興立しゝ
遂ゝ近ゝ考ふべし
東方諸国の教地施しゝその神通廣大なゝと
りふこれ等の外に「キスナ」「インデルシヤト」「ラワン」
「カムダガ」等は諸神まゝ「ドルラペッテ」「デルシイ
レテ」等の諸神如ゝ行ゝ（拔するに「とブ子ルス」の書に南
奉すとの所奉の仏像甚多し　あらゆる教中いふと
たゞ百種のそなふなどと記せり

ころ奇怪きわめて多し或はいはく「ヒストニア
ム」一隻の大鷹の上に坐して世界をの鷹の翼
邊に行ゝと（拔するには大鷹を仏書に
いをゆる金翅鳥の類なゝ）　また或はいはく
全世界をこれ一箇の大牛の頭上に行ゝ故にその牛
たゝ頭を動揺ゝれば則ち地震ゝと（拔すゝ
ニヤ国舎に仏書の説を引て個度提を一の大鼓魚の背上に居り
この鼓恒に魚の痒を苦むゝその難甲地動ゝをなすゝもち
地震ゝとゝふ地に
所言とゝ似ゝ
また或は曰く世界はこれ今現ゝさるこ
と十餘萬年前に一ッの卵の中より生ゝしゝるそれ
なりとまゝ四ゝ人死ゝゝその霊魂生きて世に

左り〳〵時にその平生善良なる者を樂界に送り
樂界をば「メルク・セエ」乳海「クイケル・セエ」砂糖海等種
〻千数万をの万〳〵きをのも地獄に墮落す
地獄をば刺棘の深井万を鉄喙の鴉万を猙獰
かしと人を嗄食ふの大万を慘刺きるの蚊蚋花出
万をかく〳〵のことくのをのまく種〻千数万をてまくい
をく人類獸畜をの敢此をを異なをとりとも
霊魂をををち異なる多なし故身死すと
りへともその生平の善惡よををく業盡んで再タび

世上に生れて或を人となを或を獸となると如此な
る奇異なる說尚はなをく多〻とりふ

日月星神とも佛說

和蘭語に日月星辰等を謂を「ナテエル・テイナル・
ゴット」とりふこれ真の生神（イキガミ）とりふるを西洋の畫
に日月星岡を佛にその中に人面の形をなすをこれ
をば生神とりふ多を表を佛乃意なをと而〻て
韃靼の部中韃漢の地に一國万を「ハンダイ」とりふ
其人恒に日星以て神として毎年これを祈る又

咬囉絨等の類の色あきらかにして圓く戴して
空に懸け日の像なりと称しとこれ
を拜祀すとりふまく地理の書を按するに北亜墨
利加洲の花他の野人まく北海新増白蝦の小人
等も日月を神としてこれに祈乞すまく亜弗
利加洲「ニギリシア」の内に一國ありて寡蛹太と云
ふ其人他の鬼神を知らず惟大地以て神となし
これに祈禱を為洲「カツフルス」國を風俗極て
いやしくこれを恰も禽獸に同じ故に曾て鬼神

法教等を知らざるこうんども惟一種の晴雨を
いのるの法ありて名をく「ホヒメ」とり蓋し甚
人屋を知らず多く無く洞穴に居を或を僅に
大枝をいとて巣となしこれに棲むゲ故み
晴を喜び雨を憂ふこれにより天を晴る
とき多く相ひはまりて歡喜踊躍しその
靈感ありとて若陰雨きれば惱怒きをめく
甚しく罵詈して已まざるなり

西洋雜記卷之三畢